

平成 29 年 6 月 15 日現在

機関番号：12102

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2013～2016

課題番号：25580013

研究課題名（和文）宗教的教義に基づく経済と環境の均衡を目指す文化価値の創出に関する参加型研究

研究課題名（英文）Engaged Research in Constructing Cultural Value for balancing economic development and environmental conservation in light of religious teaching

研究代表者

木村 武史（KIMURA, Takeshi）

筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：00294611

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,300,000 円

研究成果の概要（和文）：地球環境問題への取り組みの中で宗教的教義はどのような役割を果たすことができるのか、という課題を、インドネシア、ボゴール郡チチャダス村を舞台に、現地の協力者とともに話し合い、議論をした。世界最大のムスリム国とされるインドネシアで、宗教的教義・経済・環境保全の三者がどのような関係になっているのかを調べた。最終的には、企業、行政、インドネシア・ウラマー評議会関係者の参加を得て、「グリーン・チチャダスへのロードマップ」をテーマとする集会を持った。

研究成果の概要（英文）：This study aims at dealing with a question of how a religious teaching could contribute to solving global environmental problems by locating the study site in Cicadas, Bogor, Indonesia, the largest Muslim country. With the help of the local collaborators, the relationship among religious teaching, economic development and environmental conservation had been investigated by interviewing many different kinds of local people. The final workshop whose theme was “Interactive Dialogue: Roadmap to Green Cicadas” was held at the Cicadas village hall on December 19th, 2015.

研究分野：宗教学

キーワード：地球環境 宗教的教義 経済 文化価値 ローカル

1. 研究開始当初の背景

地球環境問題を論じる際には、多くの場合、経済、政策、技術、環境保全などが主要なテーマとなるが、宗教についてはそれほど焦点を当てられることはない。しかしながら、実際の生活の中では宗教的教義が重要な役割を果たしていることがある。では、このような宗教的教義は、経済開発、環境保全の均衡を取るようにする際に、どのような役割を果たすことができるのであろうか、という疑問が生まれた。

インドネシアは現在、経済的には極めて活発で、経済成長率も高いアセアンの中では有数の国である。ところが、ジャカルタを流れるチリウン河は、アジアで最も汚染されている河として知られているし、街中はごみが散乱しているという有様である。大気汚染もひどいことが知られている。インドネシアは世界最大のムスリム国として知られているが、かつての中東に栄えたイスラーム都市の清潔で整然として都市空間のイメージはそこにはない。

ところで、イスラームにはクルアーンによる環境保全に関する教えがある。清潔さはクルアーンの教えの中でも重視されている。では、ムスリム国であるインドネシア社会では、このようなクルアーンに見られる清潔さや環境保全についての教えは単に知られていないだけなのであろうか。あるいは、知られてはいるが、実践に移されていないだけなのであろうか。あるいは、宗教的な教えは地球環境問題の解決にはあまり貢献できないのであろうか。

このような問題関心を抱いていた時、本研究の前のプロジェクトで調査をしていた時に、本研究の研究補助者が地元での話をしてくれたことがある。それは、研究補助者が住んでいたチチャダス村の話であるが、そこはグローバル・マルチナショナル・カンパニーの工場が多数あり、地元雇用を創出しているが、同時に環境汚染も引き起こしているところであった。工場長と環境問題について話し合いを持とうとしてもなかなかミーティングの設定すらできない、という話を聞き、日本における企業の対応との違いに興味を抱いた。そして、同じムスリム同士なのに、宗教的な教えよりも経済的な事情の方が優先されると考えているのか、もしそうであるならば、なぜなのか、ということを実らかにする必要があったと感じた。それゆえ、調査の対象地として、ジャカルタ郊外にあるチチャダス村とその周辺を研究の場として選んだ。その主な理由は研究補助者がこの近隣の居住者であった、ということでもある。

2. 研究の目的

1で述べた背景を土台に、インドネシア、ボゴール郡、チチャダス村を研究の舞台とし

て、宗教的教義、経済開発、環境保全がどのような関係になっているかを、現地の関係者へのインタビュー等を通じて明らかにしようとした。

特に重要なのは、イスラームの環境保全の宗教的教えがどの程度共有されているものなのか、共有されているとしたら、それは知識レベルにとどまっているものなのか、あるいは、どのように実践に移されているのかを明らかにすることであった。実践と言っても、単に宗教的教えに基づいたボランティアな活動のことを考えているのではなく、経済活動と環境保全の間を取り持つような実践、という意味においてである。今日では、経済活動が重要であることは誰もが否定できないが、同時に環境問題の解決に向けての行動を起こさなくてはならないことも広く受け入れられるようになっている。もし、イスラームについて、その教科書的な立場での説明を受け止めるならば、この世界の事柄と宗教的な世界とは分離されておらず、結びついていることになるが、もしそうであるならば、現生的な経済活動を環境保全という活動にも何らかの影響を持っていたとしてもよいのではないかとも思う。だが、ジャカルタの環境汚染の実情を見てみると、クルアーンの環境保全の教えは社会的には機能していないのではないと思われる。それが何故なのかを明らかにしたい。

また、明らかにする必要があるのは、果たしてどの程度、現在グローバルに共有されつつあるサステナビリティという考えがインドネシア、チチャダス村界隈で知られているのか、という点である。海外の研究者が当然と思って前提としている事柄が必ずしも現地の人には知られていない、ということは良くあることである。それゆえ、このサステナビリティという考え方、環境保全といった考えが、宗教セクターのみならず、行政、経済、市民の各領域においてどのように知られているのか、実践されているのかを明らかにする必要がある。

その際には、海外の研究者（研究代表者）の視点を現地の人々に説明し、なぜ、異なる部門の人々が相互に話し合いの場を持つことが重要であるか認識してもらい、その意義を相互に承認してもらう必要があった。そして、そのような場として、関係者によるワークショップを持ち、地元の人々との対話をする機会を作ることを目指した。

3. 研究の方法

基本的な情報収集の方法としては、多様な関係者にインタビューを行うことより、様々な視点を知ることを目指した。その際、現地の研究補助者二名の協力で様々な人を紹介してもらった。というのも、現地の事情については現地で活動している人が良く知っているからであり、また、本研究の

意図が良く理解されており、研究の目的に適った人を見つけてもらう必要があった。

更に、本研究の目的は、研究補助者であるイスラーム関係者にもサステナビリティに関連する事柄を知ってもらい、一緒に回ることにより、理解を深めてもらうことも含まれていた。それゆえ、研究代表者の関心を率直に質問の形で聞くところを見てもらうことにより、一緒に考えてもらうことができる考えた。そして、関連する多様な活動へのアンテナを常に広げていてもらうことにより、研究補助者に関心を広げてもらえると期待していた。

3年間に渡って、少しずつ、研究補助者の二人も本研究の意図が分かってくれるようになり、適切な関係者を見つけてくれるようになった。このようにして、現地で環境活動をしている様々なアクターを訪問し、宗教的教義、経済活動、環境保全の状況についての見解を尋ねた。そして、それらのインタビュー等を通じて明らかになったが、現地の人々にはそれほど知られていない事実を共有していくという過程を経ることによって、知識を共有し、そこから問題解決への道筋を考えていくことにした。

しかし、話をしている中で、研究補助者2名がまだ日本には来たことがない、ということが明らかになった。そして、自分自身が日本の状況を当然のように前提として話をしていることにも気づいた。そこで、1週間ほど研究補助者2名を日本に招へいし、現在の技術のレベルで、工場が近くにある町や工場周辺も大気を含め、環境保全は達成できることを直接経験してもらった。日本訪問は二人にとって興味深いものになったと思われる。

ところで、本研究を進めていく中で様々な関係者に話を聞いたが、その中には研究補助者も知らない情報が多々あった。例えば、セメント会社のホルチムは、過去においてインドネシア国内でそのサステナビリティへの貢献で二度ほど受賞をしていたが、同行していた研究補助者はそれまでホルチムについては知っていたが、環境保全活動によって賞をもらっていることは知らなかった。また、具体的な内容も知らない、ということで、本研究者の希望で、ホルチム関係者にコンタクトを取ることができ、一緒に工場を訪問した。そこでホルチムが単に対外的な広告のためではなく、会社自身のポリシーとしてサステナビリティのための貢献を優先していることが分かった。

興味深い多くの人々にあったが、ここで記しておきたいのは、チリウン河のゴミをボランティアで片づけている若者のグループのことである。そのうちの一人は、子供の頃、河で育ったホームレスだった。他の若者は子供の頃河で遊んでいたという。かつてはきれいだっただけが汚れていくのを見て、ある時、この若者たちが自主的にゴミを拾い始めた。最初は誰も相手にしなかったが、次第に周り

から協力する人が現れてきた。やがては市の活動になるまで成長したという。この若者たちの自主的活動について受容なのは、何ら宗教的な教えに刺激されて始めたものではない、ということである。イスラームとは関係がない、と平然と答えていたことが驚きであった。

他にも重要な人に会い、話をしたが、研究補助者2名が研究代表者の問題関心に関わるような人を探してくれることによって、これら現地の人々の社会的ネットワークが広がり、問題の広がりが明らかになった。海外の研究者の問題関心が現地の人々に何らかの痕跡を残せるようにすることによって、地元での問題解決への模索への一助となるように、という意味での参加型研究を行った。

4. 研究成果

研究代表者の問題関心を理解し、共有してくれた研究補助者の協力により、地元で環境問題に関わっている様々な立場の人に会って、話を聞くことができた。そして、それらの人々の専門的な立場とともに、イスラームの教義についても話を聞いた。これらを通して、興味深い事実も知ることができた。例えば、チリウン河のゴミを取り除き、きれいにする活動を続けている若者たちに、その動機を聞いた時、子供の時から河で過ごしていたのが主要な理由であり、イスラームの教義は動機にはなっていない、という答えを聞いた時には、環境保全という観点からすれば、動機はともあれ、結果が環境保全、浄化に繋がるのであれば、それは社会的に良いという風に考えられることが分かった。他方、ボゴール郡環境部関係のスタッフが、クルアーンに見られる環境倫理、環境保全、環境浄化についての教えを人々に教えるワームショップを何度か持ったが、行動には結びつかなかった、と述べたときには、宗教としてのイスラームについての新しい視点を得ることができたと感じた。

ボゴール郡役所関係の人々に会って話を聞いた時に、グローバル企業のセメント会社ホルチムはサステナビリティ賞を何度ももらっているということを知った。研究補助者もホルチムについては知らなかった。その後、何とかホルチム関係者に連絡を取ることができ、その工場に訪問することができた。研究補助者の二人もそのような工場を訪問するのは初めてであり、非常に有益な経験となった。

これらの活動を通して、最後のワークショップを、研究補助者の協力で企画し、2015年12月19日にチチャダス村会議場で「Interactive Dialogue: Roadmap to Green Cicadas」を開催した。地元の企業関係者、行政機関、インドネシア・ウラム評議会の関係者、地元の研究協力者、研究代表者、そして、聴衆30名ほどで開催した「Interactive Dialogue: Roadmap to Green Cicadas」での

発言内容を記録したものである。インドネシア語と翻訳の日本語からなる。
報告したのは、最初に地元の研究協力者である、Irvan Z. Awaludin 氏、続いて、本研究代表者の木村、それに続いて、グローバル・セメント企業の Holcim Company から Ary Wahyu Setiawan 氏、飲料水会社の Aqua Danone から Illyas Sudarso 氏、インドネシア・ウラマ評議会から KH.Nur Ali 師、Gunung Putri 役所から Yudi Nurjaman 氏であった。前半の発表が終わったのち、聴衆から活発な質問が出され、関心の高さがうかがわれた。
このワークショップの記録をインドネシア語、日本語で作成し、報告書とした。

5．主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

6．研究組織

(1)研究代表者

木村 武史 (KIMURA, Takeshi)
筑波大学・人文社会系・准教授

研究者番号：00294611